

東亜同文書院の45年 愛知大学の70年

— 愛知大学記念館 所蔵コレクション展 —

2016年 8月24日(水) - 28日(日) 名古屋市博物館 3階

— 講演・上映会 — 2016年 8月27日(土) 名古屋市博物館 講堂

- 13:30~14:00 DVD 上映1 東亜同文書院から愛知大学の歩み [21世紀にはばたく真の国際人の育成]
14:00~14:45 講演1 東亜同文書院大学から愛知大学へ 藤田 佳久 (愛知大学名誉教授)
15:00~15:40 講演2 「日中に懸ける」を超えて - 東亜同文書院、愛大が輩出したグローバル人材に学ぶ -
佐藤 元彦 (愛知大学経済学部教授、愛知大学前学長)
15:40~16:15 DVD 上映2 映像アーカイヴズ [愛知大学記念館・愛知大学公館]
講演3 「『東亜同文書院大学から愛知大学へ』展示会・講演会」の全国展開をプロデュースして
田辺 勝巳 (愛知大学豊橋研究支援課)

入場無料・予約不要

名古屋市博物館

名古屋市瑞穂区瑞穂通 1-27-1 TEL: 052-853-2655
■ 地下鉄桜通線「桜山駅」下車、4番出口から徒歩5分

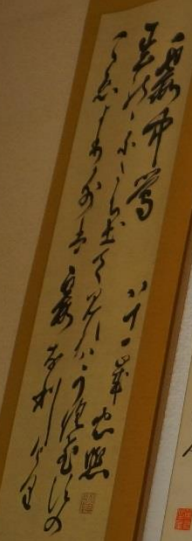
文部科学省私立大学戦略的研究基盤形成支援事業
主催 ■ 愛知大学東亜同文書院大学記念センター
後援 ■ 一般財団法人霞山会
公益財団法人愛知大学教育研究支援財団

お問い合わせ

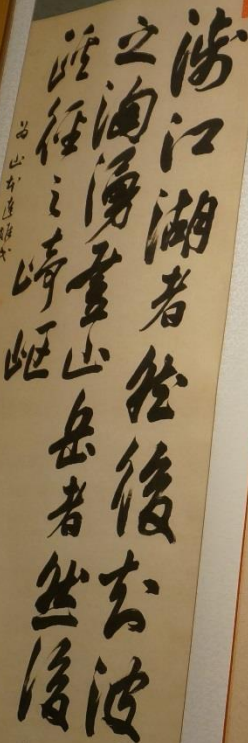
愛知大学東亜同文書院大学記念センター
〒441-8522 愛知県豊橋市町畑町1-1
TEL: 0532-47-4139 FAX: 0532-47-4196
E-mail: toa@ml.aichi-u.ac.jp
URL: <http://www.aichi-u.ac.jp/orc/>

Q 愛知大学東亜 検索

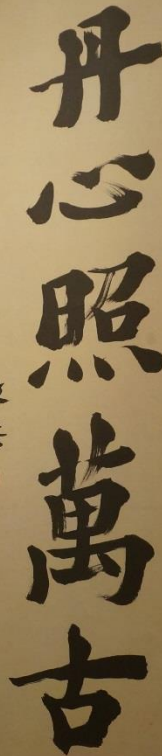




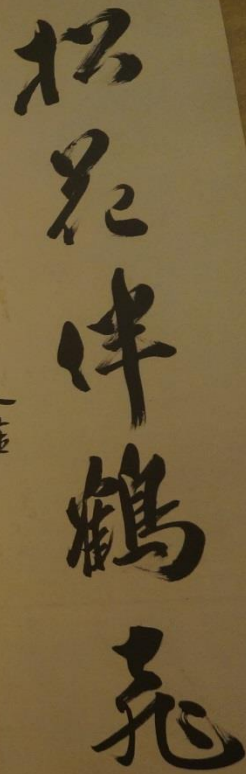
近衛忠熙（篤磨の祖父）書



近衛篤磨（第3代貴族院議長）書
（東亜同文会初代会長）



近衛文磨（第34・38・39代内閣総理大臣）書
（東亜同文書院第5代院長、東亜同文会会長）

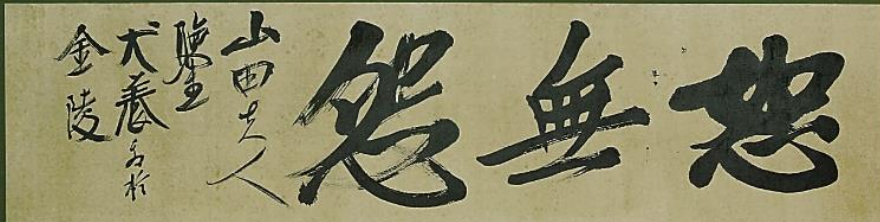


文隆

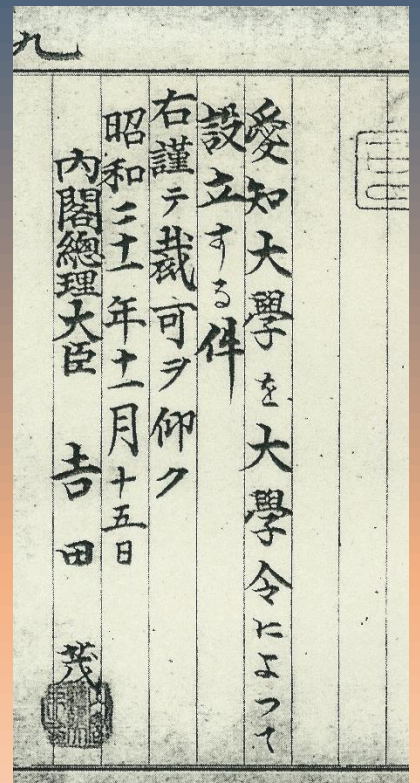
近衛文隆（文磨の長男）書

愛知大学記念館 所蔵コレクション

—東亜同文書院の45年 愛知大学の70年—



「恕無怨（「広い心があれば怨みごとはない」の意）」犬養毅（第29代内閣総理大臣）書（1929年）



「大學令に依って愛知大學を設立する件」（1946年。国立公文書館所蔵『公文類集』所収）

所蔵コレクション（抜粋）

- ・ 中華民国第3代・第6代大統領 黎元洪 書「一道同風」（1920年）
- ・ 写真「東亜同文書院招見式」
- ・ 東亜同文書院初代院長 根津一 書「至誠如神」
- ・ 写真「石射猪太郎を歓迎する東亜同文書院同窓会」（1932年）
- ・ 東亜同文書院大学の学籍簿および成績簿（1901～1945年）
- ・ 接收されていた東亜同文書院の「華日辞典」原稿カード（1954年、愛知大学へ返還）
- ・ 孫文 書「山田良政先生墓碑」（1913年）、「天下爲公」
- ・ 写真「孫文と山田純三郎」（1911年）、「孫文と宋慶齡」（1921年）
- ・ 中日友好協会会長 廖承志が小林一夫氏へ贈った書（1965年）
- ・ 愛知大学創立二周年記念アルバム
- ・ 愛知大学教科書、ノート（創立期：1946年～）
- ・ 愛知大学創設者 本間喜一がGHQ名古屋民政部に出した請願書〔手書き原稿〕



愛知大学

愛知大学は、1946(昭和21年)年、東亜同文書院大学最後の学長本間喜一や、小岩井浄、神谷龍男、木田彌三旺はじめとした東亜同文書院大学関係者が中心となり、愛知県豊橋市長の支援もあり、豊橋市の旧陸軍士官学校(旧陸軍第15師団)跡地に、当時、中部地区唯一の法文系大学として創立された。設立にあたり、吉田茂内閣総理大臣に旧制大学として許可され、日本で第49番目の開学であった。

愛知大学は、戦後混迷の時代、初代学長林毅陸、第2・4代本間喜一、第3代小岩井浄らにより礎が作られた。愛知大学の「愛知」は「智=知を愛する者が集う」を意味し、設立趣意書には戦後創立された大学としては画期的な「国際的な教養と視野をもった人材の育成」「地域社会への貢献」が明記されている。

そして、帰国時に上海から持ち帰った東亜同文書院の学籍簿・成績簿を、愛知大学にて保管している。

初代学長(1946-50)



はやし きろく
林毅陸 [1872-1950]

第2代学長(1950-55)
第4代学長(1959-63)

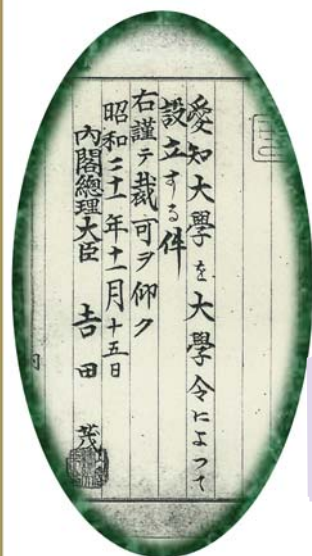


ほんま きいち
本間喜一 [1891-1987]

第3代学長(1955-59)



こいけ きよし
小岩井浄 [1897-1959]





東亜同文書院大学

愛知大学のルーツ校「東亜同文書院大学」は、1901(明治34)年に上海に誕生した「東亜同文書院」が発展し、1939(昭和14)年に大学へ昇格して成立したものです。

当時の東アジアは欧米列強の圧力が清国へ一層強まる中、日本も危機感を抱いていました。そのような中、弱体化しつつある清国と提携し、東アジアの安定を図ろうとする動きが、それまでの欧米指向中心であった日本の中に新たに芽生えました。

それをまず具体化したのが、荒尾精による日清間の貿易をめざし、貿易実務者を養成しようと1890(明治23)年に上海に開学した日清貿易研究所で、卒業生約90名を輩出しました。

しかし、そのあと日清戦争が始まり、荒尾がめざした当初の目的は達成できませんでした。日清戦争が日本の勝利におわり、清国への賠償金問題で世論が盛りあがりを見せたときにも荒尾は、清国への賠償金請求に反対表明を繰り返しました。また、日清間の貿易発展のための方策を検討していきました。

一方、近衛家の筆頭となった近衛篤磨は独学のうえ、ヨーロッパ留学を経験しました。2度目のヨーロッパ訪問時にはヨーロッパ列強のアジア戦略情報を知ると、東アジアの安定化のためには、日清間での教育、文化交流の必要性を痛感したのです。そこで、1899(明治32)年、近衛は帰路、清国に立ち寄り、近代化への改革をめざす実力者である劉坤一や張之洞の両総督に会い、日清両国学生を一緒に教育する学校を南京に開設する構想を提案し、承認を得たのです。

1900(明治33)年、近衛は両総督との協議により、南京に「南京同文書院」を開学し、日本人入学生24名は、

清語、英語、商業、政治などを学び始めました。

「南京同文書院」開学前には、両総督より、南京清国学生を、南京で教育を受けるよりも日本へすぐに留学させたい、との申し出がありました。近衛は東京自宅に「東京同文書院」を開設し、受け皿としました。なお、日清両国学生が一緒に学ぶようになったのはそれより約20年後のことです。

「南京同文書院」は設立直後、北清事変によって南京の危機が高まったため、上海へ移動することとなりました。近衛は発展を図るべく新たな全国府県費(給付奨学金)制度を設け、学生募集をし、1901(明治34)年、上海高昌廟にキャンパスを設置し、「東亜同文書院」に改名しました。「東亜同文書院」初代院長には根津一が就任し、荒尾精が意図した日清間の本格的な貿易実務者を養成するビジネススクールとして誕生したのです。カリキュラムは、清語、英語の語学と貿易、商業科目を重点的に配置し、特徴的な科目として、中国国内を主なフィールドワーク先とした「大調査旅行」が配置されました。

根津は、荒尾精と近衛篤磨の意志を受け継ぎ、永く院長を務めました。根津院長は中国古典をベースにした倫理学の授業をもち、卒業生がビジネス界で活躍する際の倫理や徳の必要性の指針を示し、書院生から神様のように尊敬されました。

「東亜同文書院」は、1945(昭和20)年、敗戦とともに幕を閉じました。卒業生約5,000名を輩出し、活躍は多方面にわたります。なお、多くの入学生は府県費生(給付奨学生)として入学、書院の経営は東亜同文会が担いました。のちに、書院の卒業生も同会で活躍しています。

荒尾精

(1859-1896)



東亜同文書院の前身、日清貿易研究所を上海に開設。

近衛篤磨

(1863-1904)



初代東亜同文会会長

根津一

(1860-1927)



初代東亜同文書院院長